

「自由の主体」を形成 する保育実践に関する 現象学的研究 (山竹伸二氏) 「研究成果報告書」を 読む手がかり

研究受託者である山竹伸二氏は哲学者です。哲学者というと腕組みしたいかめしい顔つきの人物が思い浮かびますが、山竹氏は物腰も柔らかく、やさしい言葉で哲学を語ってくれます。氏には2020年に「研究成果報告書」が提出された『自由の主体』が育つための保育実践に関する調査研究があり、これはその継続研究の成果報告書です。

自由の主体とは？

「自由の主体」と聞いて、？マークが浮かぶ人もいるかもしれません。実は私もその一人でした。「自由な主体」と何が違うの？ それとも「主体の自由」？ そもそも主体って何？ ……。この？を解く糸口は「主体」の方ではな

く、「自由」の方にあつたのです。山竹氏は報告書の冒頭に次のように述べています。

『自由の主体』とは、自由に生きる力があるということであり、自分の意志で判断し、行動ができるということだ。また、そうした行動が他者の自由を侵害せず、他者と自由を承認し合えるようになることでもある。そうした力が保育において重要なのは、自由に生きられること、そして周囲の承認が得られることこそが、子供の幸せな人生に繋がっているからだ。保育という営みが、子供たちが幸せに生きることを最も重視すべきものであるならば、当然、『自由の主体』の形成に配慮することは、身体の健康と共に最優先事項と言えるだろう。』

幸福とは何か？ 人は幸福になるために生まれてきたのでは？ 思えば「自由の主体」は子どもたちに限った議論ではなく、保育者にとっても保護者にとっても大切なテーマです。保育・子育て総合研究機構が哲学者・山竹伸二氏に研究を委託した理由もそこにありました。保育実践を哲学の視点から考えてみることで、哲学する保育者になろうよと皆さんに呼びかけたかったのです。

現象学的研究とは？

本研究には、保育の場で多くのエピソード記述を書いてきた現任の保育者へのインタビュー

が取り上げられています。その内容とともに、インタビューに応じた保育者たちの書いたエピソード記述の概要も紹介されています。そこで山竹氏は現象学の本質観取という手法を用いて、その保育的・哲学的意味の解明を行っています。

『本質観取』とは、誰もが共通して了解し得る意味（本質）を取り出す方法であり、『自由』『不安』『死』『言語』『欲望』『感情』『身体』等、様々な概念を対象としている。

たとえば『自由』という言葉を聞くと、私たちは『自由』の意味が何であるのか、即座に理解しているはずだ。それは、その意味を直観的に受け取っている、ということでもある。そして、その意味は他人と多少は意味のズレがあるとしても、大体は同じようなもの、他者と共通した部分を含んでいる。そうでなければ、『自由』という言葉を使って会話できるはずがないからだ。そこで、自分が直観した意味をしっかりと自覚し、その意味が誰もが納得し得る意味かどうか、何度も考え直してみる。それは、研究者自身の主観を切り捨てることなく、むしろそこを出発点にして、他者の視点を取り込み、普遍性を目指すやり方と言ってよい。その上で、多くの人が共通了解し得る『自由』の意味を取り出すことができれば、それが『自由』の本質と言えるのである。

本研究では、こうした現象学本来の方法（本

質観取)によって保育を考えようとするものだが、そこには二つの視点が必要だと考えている。一つは、本質観取によって人間性の本質を考察し、この現象学的な人間論、そこから導き出される保育の本質論から、個々の保育の現象を考察する視点。もう一つは個々の保育の現象から共通点を検討し、保育の本質論を見直す視点である。」

私見ですが、現象学者が10人いれば10通りの現象学があると言っても言い過ぎではないと思います。実際、私が法人内で長年取り組んできたエピソード記述は鯨岡峻氏(京都大学名誉教授)の考案された現象学的還元による保育の意味の探究です。浅学を承知で言えば、子どもの何気ない一言でも、なぜあの子はあの時あのような言葉を発したのだろう、なぜ私はあの言葉を否定的に捉えてしまったのだろう、というように保育の場の小さな出来事に問いを立て、自分の思い(思い込み)を一旦かっこに入れて横に置き、あの子の一言に拘泥してその意味を考える態度が現象学的還元です。時にそれは、はっとするような気づきを生むことも少なくありません。このようにして描かれた19のエピソード記述をインタビューの内容とともに本質観取された保育の意味が、引用の最後に書かれた「個々の保育の現象から共通点を検討し、保育の本質論を見直す視点」にあたります。

本研究は、「I. 『自由の主体』を形成する保育研究の概要と方法、II. 『自由の主体』を形成するための原理、III. 保育実践から考える子供の自由、IV. 研究の総括」の4部から構成されており、8人の保育者へのインタビューと彼らが書いたエピソードは「III」に紹介され、山竹氏自身の本質観取によって「II」で詳解された原理が保育実践によって具体的に語られています。すなわち保育実践から子どもの自由が考えられたことで、保育者には、「そうそう、私にもそんなことがあった」「そうか、あれってこういうことだったのか」と腑に落ちることの多い内容となっているのです。

一部を紹介して、「読む手がかり」とします。「これはK・Hさんが自己了解できたということでもある。保育士は子供たちの自己了解を促すだけでなく、自らも自己了解を促されることで、より一層、子供の気持ちを理解できるようになり、それが「よい保育」につながるのがある。……」

「S・M保育士の対応は、相手の身になって考え、それによって相手の気持ちを共感的に理解させるやり方で、心理学では共感誘発法と呼ばれている。……」

「このエピソードが興味深いのは、こうした対人コミュニケーションの中でリアルな世界が構成される様子を見事に示しているからだ。そ

れは自分だけの空想世界に閉じこもるのではなく、お互いの世界を認め合い、共に同じ世界で生きたいという思いが作り上げている。N・Mさんも、お互いの気持ちに向き合った結果だと述べているが、まさにそのとおりなのだと思う。それと同時に、子供の空想世界を尊重しながらも、他者と共有できる世界の心地よさを知り、そうした世界を大事にしようとする気持ちを育むことが、いかに大事なのかを痛感させられる。」

保育・子育て総合研究機構代表
室田 一樹

★本研究をよりわかりやすくお伝えするために、鼎談動画「自由の主体を育む保育」を全私保連YouTubeチャンネルに掲載しています。ぜひご視聴ください。

01 自由ってなんだろう
https://youtu.be/TEG2rGxJL_I



02 楽しい保育カンファレンス
<https://youtu.be/iqKsvu1ob1M>



03 「こどもまんなか」実現へ
<https://youtu.be/l4hr61Rii6l>



04 保育現場で頑張る皆さんへ
<https://youtu.be/Jayy7rGf4pk>



『『自由の主体』を形成する保育実践に関する現象学的研究』
山竹伸二氏(哲学者)
「研究成果報告書」は、HP あおむし通信に掲載しています。
<https://www.zenshihoren.or.jp/activity/ic/kenkyu.html>